奥能登珠洲方言の「デァ・ジャ・ヤ」

愛宕八郎康隆

1

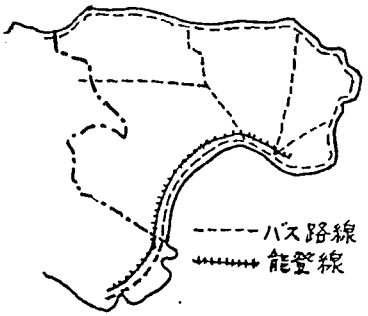
共通語、地方語をとわず、表現法体系の中に占める断定表現法の地位は、きわめて基本的なものと言えよう。

その断定表現法は、多く、一群の断定の助動詞によって支えられている。

奥能登珠洲方言の断定表現法もまた、諸種の断定の助動詞によって導かれている。すなわち、「ヤ」、「ジャ（ヂャ）」、「デァ」、「デンス」、「デス」、「ナリ」などの類がそれである。

〔地形略図〕

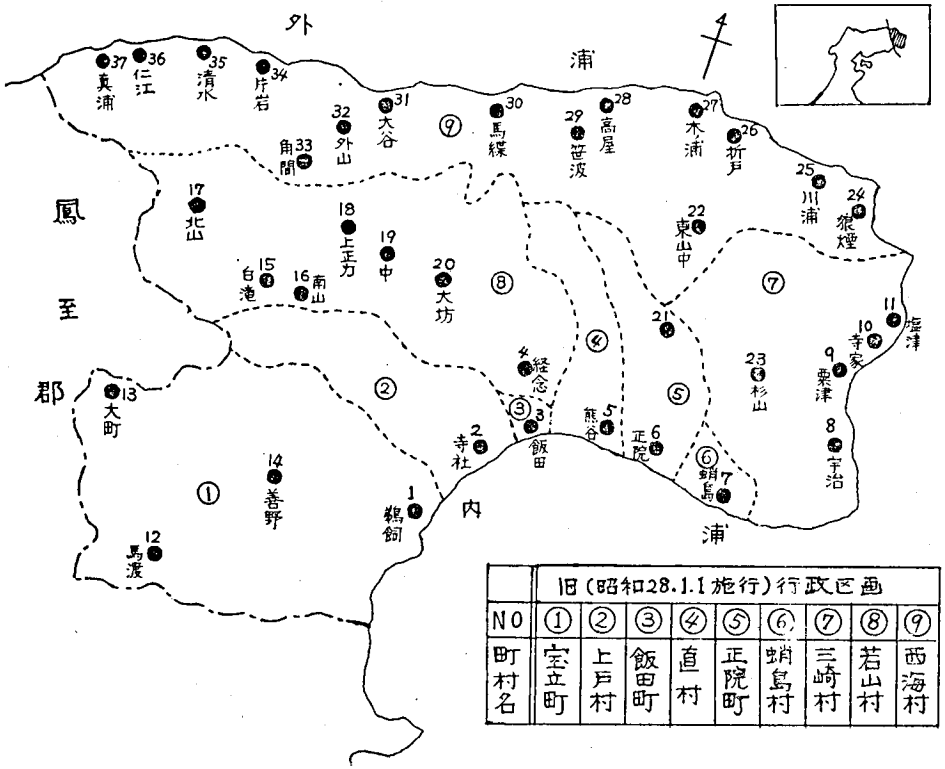
〔交通路線略図〕



この小稿では、それらの断定の助動詞のうち、「デト」、「ジャ（デャ）」、「ャ」の類をとりあげ、その生態について述べることと、あわせて、この地方でのこれら三者の成立について、理論的解釈を試みようとするものである。

以下、「ャ」、「ジャ（デャ）」、「デト」の類と順に行なわれるまを見ていくことにする。

〔調査地点一覧〕



	旧（昭和28.1.1施行）行政区画								
NO	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
町村名	宝立町	上戸村	飯田町	直村	正院町	蛸島村	三崎村	若山村	西海村

2

珠洲方言の断定の助動詞中、今日最もよく用いられているのは、1「ヤ」の類で、中でも終止形の(1)「ヤ」が目立つ。

○ホーントヤ　ゾケヤー。本当ですよねえ。（老女→中女）飯田

○ホヤサカイニ　ネヤー。そうですからねえ。（老男→a）外山

○ソヤ　トコトー。そうですってばよ。（中女→a）狼煙

○ソーヤ。ソーヤ　ノキャ。そうです。そうですねえ。（中男→中女）角間

○トーイ　トコヤ　ノキャー。遠いところですねえ。（少男→a）高屋

などのように用いられる「ヤ」である。

このような「ヤ」は、年層・性別を超えて珠洲地方全域に、広く分布が見られ、その行なわれかたは、まことに盛んである。なかでも、

○タカヤノ　ホーカラ　キタガヤ。高屋の方から来たのです。（中女→a）木ノ浦

○クライツキモ　セネドー　フーフッテ　オドスガヤー。（牛は）くらいつきもしないけれど、フーフーッておどすのです。（老女→a）北山

○アノ　ヂヂャー　メー　アガッテ　メンガヤ。あのおじいさんは目がすっかりだめになって見えないのです。（老男→a）中

などのように、述部末の「ガ」準体助詞を受けて立つ場合の「ヤ」がよく見出される。

「ヤ」終止形と並んで、連用形、(2)「ヤッ（た）」も聞かれる。

○タンダ　センセー　フタリヤッタ　ガ。たった先生は二人でしたよ。（老男→a）大谷

○アカイガ　スキナ　ヒト　ダレヤッタ　ケヤー。赤い氷水の好きな人は誰でしたかね。（中女→中男）正院

○アレ　ホンナラ　ダレダレヤッタ　ケー。あれはそれでは誰々でしたかね。（老女→a）寺家

○ソレカラ　ナンモ　ユワズヤッタ　ワネー。それから何も言わないままでしたわねえ。（中男→老女）白滝

これらは、いずれも完了の助動詞「タ」に接して用いられる。終止形「ヤ」に比べてふるわないが、「ヤ」終止形のあるほとんどの部落に、相伴って見出される。

連用形については、已然形(3)「ヤレ」がとりあげられる。

○ヘンダク　シタガヤレドー　イマ　ハヤ……。（昔は）縫い物をしたのですけれど今はもう……。（老女→同）折戸

○イクツモ　ヤルガヤレドー　シライデ　ヤラレンケー。（演芸会には）いく種類もの芸をやるのですけれども（やりかたを）知らないのでやれないのです。（中女→a）笹波

○オカタニー　クルガニ　ユートッタヤレドー。岡田に来るように言っておいたのだが。（中男→中女）南山

○イマ　ハヤ　オシメヤレドモ　ネヤ。今はもう「オシメ」ということばですけれどもねえ。（老女→a）馬渡

これらの「ヤレ」は、すべて古態の接続助詞の「ド」、時に「ドモ」

に接して、「ヤレド」、「ヤレドモ」のように固定的に用いられ、中年層以上の男女、特に老年層によく見出される。

分布ということでは、内浦側にはうすく、馬渡・善野・白滝・上正力・中・大坊・岡田・杉山・笹波などの山地部に濃い分布が辿られる。

「ヤ」、「ヤッ（た）」、「ヤレ」のほかには、いわゆる断定の推量形(4)「ヤロ」がある。

○ソヤロ　カー。そうでしょうか。（老男→中男）角間

○センセー　オラズヤロ　カネヤ。先生はおられないのでしょうかね。（老女→中女）真浦

○ホヤロー　ノキャ。そうでしょうよねえ。（中男→同）大坊

○ドーシタンヤローテテー。どうしたのだろうといって。（中女→同）正院

○ダッチカンパヤロー。だめなのでしょう。（少女→中女）善野

などのように用いられる「ヤロ」である。

「ヤロ」は、「ヤ」終止形と並んでよく栄えており、珠洲地方の全域にその分布を辿ることができる。

以上、「ヤ」、「ヤッ（た）」、「ヤレ」、「ヤロ」と、「ヤ」の類を見てきたが、品位は、まず中等位からやや上と受けとれる。

このように、「ヤ」の類は、珠洲方言の断定の助動詞中、最も有力な一類をなし、この方言での、いわば共通語的地位に立つものと言うことができる。

3

「ヤ」の類については、2「ジャ（ヂャ）」の類、つまり、(1)「ジャ（ヂャ）」、(2)「ヂャッ（た）」、(3)「ヂャロ」がとりあげられる。まず、「ヤ」の類の優勢に対して、「ジャ（ヂャ）」の類の劣勢が注目される。

終止形、(1)「ジャ（ヂャ）」を見よう。

○ホントジャー。まったくです。（中女→中男）馬縲

○ソージャ。ソージャ。そうです。そうです。（中男→a）笹波

○アンタワ　ヒロシマノ　ヒトジャ。ソリャゴクローサン。あなたは広島の人です？それはご苦労さま。（老男→a）笹波

○ホーントジャ　ワイ。ほんとうですわよ。（老女→同）大谷

などのような用例に接することができる。

しかし、右の諸例文のようなものは乏しく、その大半例は、特定の音環境にあらわれる事実が注目される。

ここに特定の音環境というのは、

○コレ　ナンヂャ　ヨー。これは何ですかい。（老女→中女）飯田

○コレ　ナンヂャ。コレー。コレ　ナンヂャ　ポー。これは何です。これ。これは何ですか。（老男→老女）善野

○カワイ　モンヂャ　ケヨー。かわいものですよお。（老男→a）外山

○チューハンヂャ　ゾー。昼食ですよお。（中女→青男）狼煙

○ヤマエ　イキャー　タクサンヂャ。山へ行けば薪物は十分です。（老女→同）折戸

などに見られるように、撥音〔ン〕が前接音となる環境のことである。なかでも、「ナン」（何）、「モン」（物）などの特定語に接しやすい。

「ナン」に下接する場合について言えば、

○ナンギャテー。何ですって。（中女→同）折戸

○ナンギャテテ。何だと言って。（老女→青男）岡田

などの短形の慣用文に固定的に見出されるのが注目される。ちなみに、「ナンヤテテ。」の表現形を見出すことはできない。

「ナン・ギャ」はまた

○イナコキッテ　ナンギャワイネ　カネノナンボンモ　アルガオ……。稲こき（道具名）といって何ですわねえ金の何本も出ているものを…。（老男→a）大町

○ホレ　オラカタデワ　ナンギャゾネ……。それは私の村では何ですよね……。（老女→a）川浦

などのような間投文、それに

○ナンギャ　ワネー。イマー　ハヤ　ナンモ　ヨケ　ダサン　ナネー。何ですわねえ。今もう少しも多く出荷しないわねえ。

＜炭＞（老男→a）大町

などのような特定の発話文にも見出されるというぐあいである。

連用形(2)「ギャッ（た）」について見ても、

○オモシロイ　モンギャッタ。アノ　タコトルガー。おもしろいものでした。あの蛸をとるのは。（老女→a）仁江

○ミナ　ギンギャッタレド　イマノワ　ミナ……。（明治の貨幣は）皆銀だったけれども今のは皆……。（老男→a）大町

などのような例は、ほとんど稀にしか聞かれない。

また、

○コレ　ナンギャロー。これは何だろう。＜絵を見て＞（老女→a）岡田

○ソトエ　ダサレンギャロー　ネヤー。外へ出されないでしょうねえ。（老男→中男）大坊

などのような推量形の(3)「ギャロー」も、きわめて微弱な分布を示すにすぎない。

これら、連用形・推量形のわずかな用例もまた、前接音が撥音であることは注目される。

「ジャ（ギャ）」の類の分布は、「ヤ」の類の辿られるおおかたの諸部落にこれを見ることができるが、その行なわれかたは、いかにも微弱であって、その用法も先に見たように局したものになっている。保有者層は、ほとんど老年者層に限られており、品位も、「ヤ」の類よりは、一段低く意識されている。

「ジャ（ギャ）」の類のふるわない状況は、およそ以上のようなぐあいである。

4

「ヤ」の類、「ジャ（ギャ）」の類と見てきて、今ここに、3「デァ」の類、つまり(1)「デァ」、(2)「デァッ（た）」(3)「デァレ」、(4)「デァロ」などがとりあげられる。

まず終止形の(1)「デァ」について見よう。「デァ」は、もっぱら外浦地方（旧西海村にあたるが、狼煙・川浦・東山中の諸部落を除く。）、および旧若山村の山地部（白滝・南山・北山・上正力などの諸部落）に行なわれている。

まず、外浦例をあげてみよう。

○テッカラ　カクヨナ　ヒトデァー。（手紙でも）自分で書くよ

うな腕のたつ人です。（老男→a）折戸

○オレトワ トー カシラデァー。わたしとは十才年上です。（老女→a）木ノ浦

○アッコニ ウマレタ モンデァー。あそこに生れた者です。（老女→a）高屋

○コンバン ヒトッデァ ガー。今晩は一人ですよ。（中女→中男）大谷

○タイフーワ コンガデァ ナー。台風は来ないのですねえ。（中男→同）片岩

○ナニ スンガデァー。ガンコナ コト セマーイ。何をするのだ。乱暴なことをするな。（老女→少女）仁江

○イノクノワ クチバッカシデァ トコト。動くのは口ばかりですってば。（老女→a）真浦

次に、旧若山村の山地部例をあげてみる。

○ジョンジョオ ヘテ ヘニャ コァー ナイガデァ ト。（体操というものは）順序にしたがってやらないと効果がないのですと。（老男→a）上正力

○エマノ ニンゲンワ マイラント シトルガデァ。今頃の人はお寺へ参らないことにきめているのです。（老女→a）白滝

○ガラスァ ワレタ モンデァ。ガラスがわれたというわけです。（中男→老女）南山

○ユーガオ ソレデァ ワ。夕顔（冬瓜）というのはそれです。（老女→老男）北山

「デァ」の連用形(2)「デァッ（た）」、已然形の(3)「デァレ」は、

○ドヨーノ イリガ ハツカデァッタサカイ。土用の入りが二十日だったから。（老男→a）上正力

○アマグワ ゴザデァッタ ワイ。雨具はござでしたよ。（老男→同）北山

○ヤクダイノコター イランチューデァレドー。薬代はいらないというのだけれども。（老男→同）外山

○オリャ アヤマットンガデァレド……。わたしは仏にわびているのですけれども…。（老女→a）仁江

などのように用いられてはいるものの、これらは、「デァ」の聞かれる部落の老人層にのみ、稀に見出される。

これらに比べて、いわゆる推量形の(4)「デァロ」は、比較的よく行なわれている。

○ナンカ アッデァロ カナー。何か他の言いかたがあるだろうかねえ。（老女→同）折戸

○ドーシッデァロ ノキャー。どうするだろうかねえ。（老女→中女）大谷

○ホンナ コトモ ユワンデァロー ガ。ノカー。そんなことも言わないでしょうが。ねえ（中男→同）片岩

○エソエ エレテ キタガデァロ ゾイノー。磯へ入れてきたのでしょうよねえ。〈アワビ〉（老男→中女）仁江

○ソーデァロ ガケーヨー。そうでしょうよね。（老男→a）真浦

以上は、外浦地方例。旧若山村山地部としては、

○チャワンデァロートー サカズキデァロートー……。茶碗であろうと盃であろうと…。（老女→a）上正力

○コンヤ　シラタケン　オッデァロー。　今夜は白滝にいるでしょう。（老女→中女）白滝

○コトシノ　ホンナガ　エランデァロ　ガイヤー。今年のそんなものはいらないでしょうがね。（老女→a）南山

○フッキャー　デトッデァロー。茎が出ているでしょう。（老男→同）北山

などをあげることができる。

「デァロ」もまた、「デァ」の分布域内の、主として老年層に見出される。

このように「デァ」の類は、外浦地方、旧若山村山地部の、主に老年層に見出されるが、外浦西部の大谷・片岩・清水・仁江・真浦などでは、これが中年層にまでも聞かれる。「デァ」の類はその分布域こそ限られてはいるが、その地域内での生息状況には、相当に根強いものが認められる。用法も、「ジャ（ヂャ）」ほどには固定化していないのが注目される。

品位は、「ヤ」の類に比べて、いくぶん低く意識されており、「ジャ（ヂャ）」の類同様、うちとけた気分で用いられている。

5

以上のように見てきて、今、「ヤ」、「ジャ（ヂャ）」、「デァ」各類の行なわれざまの大勢を要約してみると、次のように言うことができようか。

「ヤ」の類は、圧倒的に優勢で、特に終止形「ヤ」の活躍が目立ち、これが、珠洲の全域、全年層に及んでいる。「ヤ」についでは、推量形の「ヤロ」、連用形の「ヤッ（た）」があり、それに、老年層に局して用いられている已然形の「ヤレ」が見出される。

「ジャ（ヂャ）」の類は、ほぼ、全円的な分布を見せてはいるが、微弱でふるわず、終止形「ジャ（ヂャ）」はまだしも、連用形「ヂャッ（た）」、推量形「ヂャロ」などは、ほとんど聞かれない。

「デァ」の類は、珠洲地方でも外浦地方、および旧若山村山地部の、主として老年層に、終止形の「デァ」中心に見出される。推量形の「デァロ」がこれにつぎ、それほどにふるわない「デァッ（た）」、「デァレ」が見られるという状況である。

6

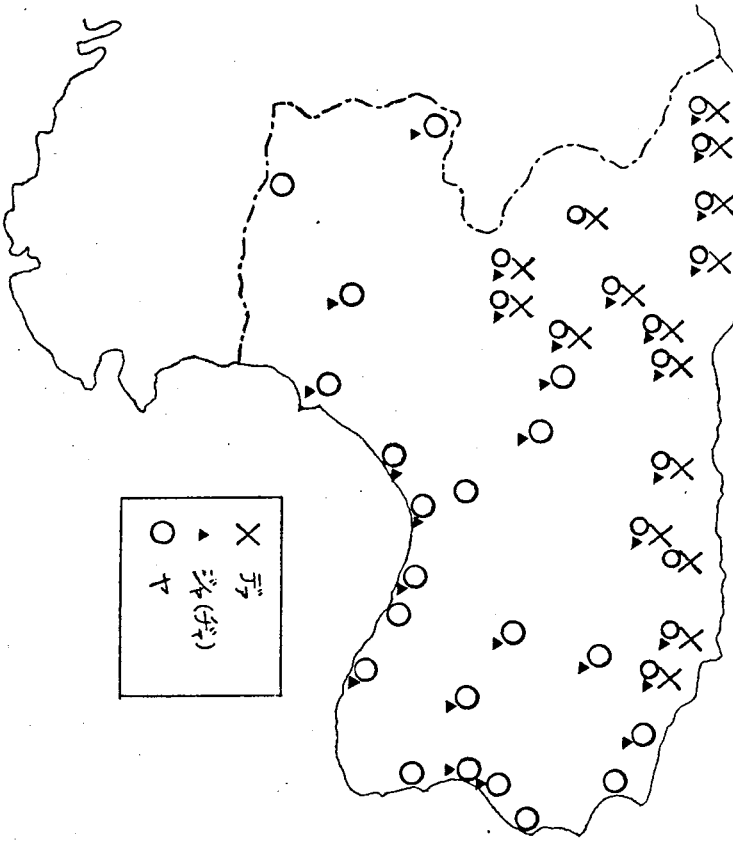
さて、このような共時論的観察に基づいて、この地方の「デァ」、「ジャ（ヂャ）」、「ヤ」の類の成立について考える時、どのような通時論的解釈、推論が許されるであろうか。

従来の文献による国語史研究の説くところにしたがえば、一般に、「デァ」、「ジャ」、「ヤ」の成立推移は、次のように考えられている。

すなわち、「デアル」の「ル」の脱落形から「デァ」が生じ、その「デァ」を祖（おや）として、片や「ダ」、片や「ヂャ」の成立を見、「ヂャ」は、「ジャ」に移り、さらに軟化して「ヤ」を生むに至ったという推定である。

ところで、奥能登珠洲方言における「デァ」、「ジャ」、「ヤ」の類も、果してそのような成立推移の過程を辿ったものであろうか。結論的に言えば、必ずしもそのように単直な推移を辿ったものではなかったように思われるのである。

藤原先生は、特に、奥能登のこの問題に触れられ、その注目すべきご見解を、「方言学」（『日本語方言上の「ダ・ジャ・ヤ」』



「デア・ジャ・ヤ」分布図

P286）にお示しになっておられる。その一節は、次のようなところである。

『おそらくは、奥能登の「ヤ」〔ja〕は、「デアル」の「デア」〔dea〕、その〔dja〕となったものあたりから、直接に生起したものではないか。今日、能登東北隅に、古態の「デァ」助動詞を聞きうるのは、ここに大いに参考になる。「デァ」にならんで、「ヤ」が分布している。（「ジャ」もある。）「ヤ」は、多分、「ジャ」をまたないで、いまも生きているその「デァ」のようなものからおこってきたのではなかろうか。――「ヤ」とならんで「ジャ」もおころうとし、現にそのいくらかが分布しているのかと思う。』示唆に富む、注目すべきご見解だと思う。

ここでは、そのような解釈を裏付けうるのではないかという事実、事例の指摘と、それらについて若干の私見を述べてみたいと思う。

すでに見てきたように、「デァ」、「ジャ（ヂャ）」、「ヤ」の類には、それぞれの分布相が見てとられた。

これを部落本位に見ると、

○「ヤ」、「ジャ（ヂャ）」、「デァ」類の三者併存の見られる部落

「デァ・ジャ・ヤ」助動詞分布一覧表

地点番号		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37
地名		鶴飼	寺社	飯田	怪念	熊谷	正院	蛸島	宇治	粟津	寺家	塩津	馬渡	大町	善野	白滝	南山	北山	上正方	中	大坊	岡田	東山中	杉山	狼煙	川浦	折戸	木浦	高屋	笹波	馬渕	大谷	外山	角間	片岩	清水	仁江	真浦
地域		(		内						浦		)	(		山				地			部		)	(			外							浦			)
「ヤ」の類	ヤ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ヤッた	○	○	○			○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○		○			○	○	○	○		○		○	○		○			○	○
	ヤレ		○					○		○	○		○		○	○	○		○	○	○	○		○			○			○				○			○	○
	ヤロ(ー)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
「ジャ(ヂャ)」の類	ジャ・ヂャ	⊙		○⊙		⊙		⊙		⊙				⊙	⊙	⊙	⊙		⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙		○⊙	○⊙	○⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙
	ヂャッた													⊙													⊙										⊙	⊙
	ヂャロー																				⊙	⊙			⊙		⊙			⊙								
「デァ」の類	デァ(ー)															○	○	○	○								○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	デァッた																	○	○								○							○	○	○	○	○
	デァレ																																○				○	○
	デァロ(ー)															○	○	○	○								○			○		○	○	○	○	○	○	○

⊙は、前接音が撥音であることを示す。(一部促音である場合を含む)

白滝・南山・上正力・折戸・木ノ浦・笹波・馬縞・大谷・外山・角間・片岩・清水・仁江・真浦

○「ヤ」、「デァ」二類の併存の見られる部落

北山・高屋

○「ヤ」、「ジャ（ヂャ）」二類の併存の見られる部落

鵜飼・寺社・飯田・熊谷・蛸島・栗津・大町・善野・中・大坊・岡田・東山中・杉山・狼煙・川浦

○「ヤ」類のみの見られる部落

経念・正院・宇治・寺家・塩津・馬渡

というように出入りのある状況は注目にあたいする。〔「デァ・ジャ・ヤ」助動詞分布一覧表参照〕

このような分布の様相は、三者の成立、推移に関する何らかの反映として受けとることができるはずである。

三者のうち、「デァ」の類が、外浦地方とか旧若山村の奥地部などの僻地に、古老のことばとして分布を示すことは、これが古態のものであることを物語っている。では、この古態の「デァ」、あるいは「デァ」的なものから生れたのは、どんな事象形態のものであっただろうか。珠洲地方に関する限り、今日、「ダ」を見ることができないことからすれば、まず、「ダ」は生れなかったように思われる。「デァ」、あるいは「デァ」的なものから生れたかと思われるものには、やはり「ヂャ」が考えられる。と言うのも、調査地点37のうち、14地点で「デァ」と「ヂャ」との併用の事実が認められるからである。

ところで、その「デァ」と「ジャ（ヂャ）」と併用部落の実情を見ると、「デァ」を言う同一人が、「ジャ（ヂャ）」をも「ヤ」をも言うというありさまであり、加えて注目すべき事実は、「デァ」の使用者が「ヂャ」を言う場合、前接音が撥音（時に促音）の音環境のものが大部分であるということである。また、「デァ」を言わない部落の「ヂャ」も、そのすべてが前接音に撥音をとる事実が認められる。

これらのことから、「デァ」あるいは「デァ」的なものが広く珠洲地方に栄えた時期に、「ヂャ」への傾斜があったとすれば、このような特定の音環境のもとでではなかったか。したがって、「デァ」が無差別に、全面的に「ヂャ」に傾斜していくことは、まず起らなかったのではなかろうかと考えるものである。

ここで、「デァ」の類と「ヤ」の類との併存部落のことが大いに注目される。

併存部落の高屋・北山は、いずれも珠洲地方では最も奥まった地域（外浦・旧若山村の山地部）にあって、言わば古態事象の遺存しやすいところである。そこに「ジャ（ヂャ）」がなくて（尤も、外浦・若山の山地部は、おしなべて「ジャ（ヂャ）」は、きわめて微弱であるが）、「デァ」の類に、もっぱら「ヤ」の類が、対応よく並び行なわれている事実は、殊に注目をひく。

また、数少ない僻地部落（外山・仁江・真浦）にではあるが、今日、古態の接続助詞「ド」、「ドモ」に接する「デアレ」が聞かれ、これに並んで、かなり広範な地域に「ヤレド」「ヤレドモ」のような「ヤレ」が聞かれることも注目される。（ちなみに「ジャレ（ヂャレ）」は聞かれない。）その「ヤレ」が、「デァ」のある部落、つまり外浦地方や旧若山村の山地部などの、総体に古態事象を留めやすい部落の老年層に見出される事実は、「ヤレ」の古さ、ひいては

「ヤ」の素姓の古さをにおわすものとして受けとめることができる。

ここにも、「デァ」の類と「ヤ」の類との深い関係がよめるように思われる。

「デァ」と「ヤ」との深い関係ということで、今一つ注目すべき事実を指摘してみたい。

珠洲地方の「デァ」の分布する地域では、「ホンナ゚ガ゚デァ。」（そうです。）のように、「デァ」が準体助詞「ガ゚」を受けてする断定の表現法が、比較的よく行なわれている。一方に、「ホンナ゚ガ゚ヤ。」のように、「ヤ」が準体助詞「ガ゚」を受ける「〜ガ゚ヤ」形式の表現法が、きわめて盛んである。このように、「ガ゚デァ」と「ガ゚ヤ」との間には、すなおな対応関係が見てとられる。「デァ」だけでなく、準体助詞「ガ゚」にも古態性を認めることができるとするならば、「ガ゚デァ」対「ガ゚ヤ」の対比から導かれる「ヤ」の素姓が注目されてくる。加えて、「ガ゚デァ」と「ガ゚ヤ」との対応関係に対して予想される「ガ゚ジャ（ガ゚ヂャ）」が、対応関係から脱落しているという事実には、「ジャ（ヂャ）」と「ヤ」が辿ったであろう運命が、微妙に反映しているように思われる。

以上のような諸事実に基づいて、珠洲方言における「ヂャ（ジャ）」、「ヤ」の成立推移について、次のような一つの推定を下してみたいと思う。

かつて、珠洲地方全域に遍満していたかと思われる「デァ」、あるいは「デァ」的なものから、地域性によって、ある地域ではほとんど「ヂャ」、「ジャ」を素通りするのに近い状態で、「ヤ」だけが生まれ、落ち着き、ある地域では、「ヤ」を起しつつ、特定の音環境のもとで「ヂャ」（ひいては「ジャ」）も、半ば平行的に生まれることもあったのが実情ではなかっただろうかと。平行的にとは言っても、「デァ」の持っている断定の助動詞としての生命を、正統——正しい血すじとして受けついでいくような地位を、「ヤ」は「ヂャ」に対して常に優位に築いていくことになったものと考えられる。今日、見る限りでの「ヤ」類、「ジャ（ヂャ）」類の勢力関係は、その始めから、優劣拮抗の事態のなかったことを思わせるものである。

したがって、珠洲地方に関する限り、時間の前後関係において、明確に、「デァ」から「ヂャ」に推移し、「ヂャ」、「ジャ」が栄えるという段階を経て、「ヤ」が後生するというような事態は、ほとんど起り得なかったのではないかと考えるものである。

7

ここに試みた、ささやかな推論が、文献による国語史の研究に、何ほどかの肉づけを果すことができるならば幸いである。

（付記）
○本稿に使用した資料は、昭和30年4月から、同43年8月までの臨地調査によって得たものである。
○文例後の（　）内のaは、筆者を示す。
○本稿は、昭和41年11月国語学会で発表したものを骨子としたものである。
○本稿をなすにあたっては、藤原先生からいろいろご指導をいただいた。また、地元では下石茂信氏、間谷庄太郎氏ほか多くの方々のご協力をいただいた。あつくお礼を申しあげる次第である。

〔昭和43年9月30日〕
——長崎大学助教授——